

# 日本語学習者にみられる「断り」の表現 ——日本語母語話者と比べて——

カノックワン ラオハブラナキット\*

キーワード: 断り, 理由の付加成分, 不可の付加成分, 否定的マーカー

## 要 旨

「断り」行動は、相手の意向に反して遂行されなければならないため、人間関係を損ねる危険性を持ち、とりわけ学習者は第二言語で表現しなければならないのでコミュニケーション上の誤解や失敗を招きやすい。ここでは、電話での実際の会話を資料として、書き込み式やロールプレイ方式では観察のしにくい「断り」の表現を観察し、その使用の特徴を母語話者と比較しながら学習者の問題点を考察した。その結果、学習者は断りの「理由」の命題に後接する形式(例: 理由+ので)を比較的上手に用いるのに対して、相手に対する心配りを示す終助詞や断りの表明である「不可」の命題に前接及び後接する形式(例: やっぱり無理かな)、そして「断り」の前触れとなる「否定的なマーカー」(例: うーん、あはー)の使用は困難となっていることが分かった。これら「断り」でみられる形式は、先行研究や日本語教科書によって殆ど触れられていず、注目すべきところと思われる。

## 1. はじめに

「断り」行動は、相手の意向に反して遂行されなければならないため、人間関係を損ねる危険性を持ち、母語話者にとっても難しい行動の一つであるが、とりわけ学習者は「断り」を第二言語で表現しなければならないので、コミュニケーション上の誤解や失敗を招いたり、母語話者への違和感を与えたりすることがある。このため「断り」の発話行為は、コミュニケーション能力に関する研究として、よく取り上げられているが、研究のデータ収集方法は、特定の状況を設定し対象者に断りの発話を書き込んでもらうもの(生駒・志村 1933; 藤森 1995 など)か、断りのロールプレイをしてもらうもの(横山 1993; 熊井 1993 など)が多い。ところが、これらの方法では必ずしも実際の自然な場面で使われるものと同じ表現を観察できるとは限らない。例えば「用事があるので行けない」のような「断り」において、「ええ、うーん、用事があるので」の「ええ」のような相手に対する受け答えの形式や「うーん」のような自分の気持ちを暗示する

\* LAOHABURANAKIT, Kanokwan: 筑波大学大学院文芸・言語研究科(言語学専攻博士課程).

ような形式、また「難しいかな」の「かな」のような文末表現など、実際の会話でよくみられる表現を書き込み式のデータから観察することには無理があるように思われる。これらの形式は相手に対する配慮を示し、対人関係を良好に保つ重要な役割を果たしているもので、上手な断りの方略の一つであり、注目すべきはすのものである。

そこで、本研究では、実際の電話での会話から収集したデータをもとに、相手に対する配慮を示す形式に焦点を当て、日本語母語話者と比較しながら、日本語学習者の「断り」の特徴とその問題点を検討する。

## 2. 研究範囲と観点

本研究では「依頼」「誘い」に対する「断り」を研究対象とする。そして、「断り」の本質ともっとも関わっている「断り」の中心構造は、「できない、だめ、難しい」などのような「不可」を表明する部分と、断る「理由」を表明する部分の二つの部分から成る<sup>1</sup>と考え、この中心構造に焦点を当てて<sup>2</sup>「断り」の表現を検討することにする。そして、本論では、実際の会話にみられる「断り」の中心構造「理由」「不可」にさらに種々の付加成分がつくことに注目する。そこで、次の例で示すような中心構造のモデルを設定する。

<u>あは一</u>	<u>ちょっと</u>	用事がある	ので(略)	うーん	、	<u>やっぱり</u>	難しい	<u>かな</u>
〈c1〉	〈a2〉	(理由の内容)	〈a1〉	〈c2〉		〈b2〉	(付加の内容)	〈b1〉

図1 「断り」の中心構造のモデル

モデル中の〈a1〉-〈c2〉を以下に説明する。

### a. 「理由」の付加成分:

〈a1〉「理由」の命題に後接する形式; 「理由」の内容に付加される節末及び文末形式(「ので、から、のだ」など)、及びそれらに「ね、よね」などの終助詞や「けど」のような接続詞が付加されたもの(eg. 理由+ので、んだね、んですけど)。

〈a2〉「理由」の命題に前接する形式; 「理由」の内容を修飾し和らげの効果を持つ形式(ちょっと+理由)。

<sup>1</sup> 熊井(1993)は、「理由」を表す部分と「不可」を表す部分を「断り表現の構造」として取り上げているが、これ以外にも「代案提示」「延期」「批判」などを「断り表現の構造」の中を含め、本研究とは異なった分析を行っている。

<sup>2</sup> したがって、「断り」とともによくみられる「謝罪」や「代案」などの言語行動については今回は研究の対象外とする。「謝罪」や「代案」などは、断りの談話の中で重要な役割を果たしているが、本稿では「断り」の中心となる形式を分析することが目的であるため、「謝罪」や「代案」などについては今後の課題とする。

## b. 「不可」の付加成分:

〈b1〉「不可」の命題に後接する形式;「不可」の情報内容とは別に、話し手の心的態度を表す終助詞や文末形式(eg. 行けないな, 難しいかな).

〈b2〉「不可」の命題に前接する形式;「不可」の命題に前接し、「不可」の内容を修飾し和らげの効果を持つ形式(eg. やっぱり難しいかな).

## c. 否定的マーカー:

〈c1〉「理由」の内容を特に修飾していないが、「理由」に先行し、断る者の否定的な態度を表す形式(eg. あ, うーん, あはー).

〈c2〉「不可」の内容を特に修飾していないが、「不可」に先行し、断る者の否定的な態度を表す形式(eg. あ, うーん).

「断り」の中心構造は典型的には上記のモデルようになるが、会話によっては「不可」が現れず「理由」だけのものがあったり、「理由」が現れず「不可」だけのものがあったりする。また、一つの「不可」に対していくつもの「理由」が現れる場合もあり、「不可」が一つではない場合もある。さらに、〈a1〉-〈c2〉の表現形式についても、どれもが全ての場合に必ず現れるというわけではない。また、本研究では、「理由」「不可」の出現頻度や出現順については扱わない<sup>3</sup>。したがって、実例中の「理由」「不可」を別々に取り上げ、その付加成分〈a1〉-〈b2〉と先行する否定的マーカー〈c1〉-〈c2〉に焦点を当て、各表現形式の種類や出現率を示し、日本語学習者と母語話者の比較を行うことにする。

## 3. 使用データ

使用したデータは、数人の日本人や学習者に頼んで電話での会話を録音してもらったもので、その中から「断り」を含むものだけを選んだ<sup>4</sup>。日本語母語話者同士の実際の会話(断る者=日本語母語話者、以後「J」とする)と、日本語学習者同士または日本語学習者と日本語母語話者の実際の会話(断る者=日本語学習者<sup>5</sup>、以後「NJ」とする)を文字化したものを資料とする。JとNJの異なり人数、データを収集した期間、断り場面の数、「断り」を含んだ会話の総時間数は次の

<sup>3</sup> 「理由」、「不可」の出現頻度や出現順については、カノックワン(1995)で日本語母語話者の会話を資料にしその傾向を示している。また、ここでは「命題」の内容からの影響(例えば「時間的・能力的にできないため断る」場合と「時間的・能力的に可能だが、断る」場合では断り方が違うなど)が観察されたが、今回の分析では日本語母語話者と学習者の間で特に顕著な違いが観察された「理由」と「不可」の付加成分と「否定的マーカー」のみに注目した。今後の課題として学習者の自然会話を資料にした「命題」の内容からの影響を考慮する必要もある。

<sup>4</sup> 会話録音の協力者に対して会話内容、話し方等のコントロールはいっさいしていない。したがって、全く自然な発話であるが、協力を求めるために録音データの扱い方や「断り」の場面のデータを必要としていることなどを説明した場合もあるので、協力者がそうしたことを会話中に意識した可能性はある。しかし、その場合でも電話の相手はそうした経緯を全く知らない。

<sup>5</sup> 本稿のデータとなった日本語学習者は主に東南アジア出身者であった。内訳は注7を参照。

通りである。

J のデータ (15 人) : 1994 年 6~9 月の間 : 17 例: 約 40 分

NJ のデータ (11 人) : 1995 年 6~9 月の間 : 19 例: 約 48 分

また, J, NJ と「相手との関係」<sup>6</sup>, NJ の日本語学習レベル<sup>7</sup>については, 表 1 の通りである。

表 1 J, NJ と「相手との関係」

相手との関係 データ		相手との関係				合 計
		同等・親しい	同等・親しく ない	相手が目上・ 親しい	相手が目下・ 親しい	
J の データ		12 例	2 例	1 例	2 例	17
NJ の データ	中級 (4 人)	6 例	1 例	2 例	—	19
	上級 (7 人)	6 例	1 例	3 例	—	

#### 4. 日本語学習者にみられる「断り」の表現形式

##### 4-1. 「理由」の付加成分

##### 4-1-1. 「理由」の命題に後続する形式 (a1)

藤森(1995: 83)は, 「断り」における「弁明」(本稿の「理由」に相当する)の節末及び文末形式を以下のようにまとめている。

- ① ノダ型: ~んです / ~んだ / ~の, 及びそれらに「ね, よね」などの終助詞が付加されたもので文末にくるもの
- ② カラ型: ~から, ~ですから, ~ものですからなど節末, 文末にくるもの
- ③ ノデ型: ~ので, んで, など節末, 文末にくるもの
- ④ テ形型: テ形が節末, 文末にくるもの
- ⑤ 命題直接提示型: 命題内容(例: 用事がある)をそのまま提示し, 他の形式を付加しないもの
- ⑥ シ型: 理由をあげる言い方, 「~し」と例示する場合によく用いるもの

本稿もこれらの文末類型を参考にし, 「理由」の命題に後接する形式として扱うが, 「ノダ型」

<sup>6</sup> 以下では「相手との関係」を「親しさ(親しい, 親しくない)」と「年齢または地位(目上・同等・目下)」の二つの尺度で示す。

<sup>7</sup> 中級か上級を決める基準は, 学習者が属している筑波大学留学生センターのレベルに従った。現在筑波大学留学生センターで授業を受けていない学習者の場合は, その人の, 日本語学習期間・学習場所・日本に滞在した期間・筑波大学留学生センターの最終レベルなどを考慮して, 判断した。また, 日本語学習者の出身は以下の通りである。

中級(全 9 例): タイ人 6 例, ミャンマー人 1 例, フィリピン人 1 例, パーレーン人 1 例。  
上級(全 10 例): タイ人 5 例, インドネシア人 5 例。

「ノデ型」「命題直接提示型(以下、命題型<sup>8</sup>)」については、「～(です)けど」が付加される「ノダ+ケド型」「命題+ケド型」と、「ね、よね」などの終助詞が付加される「ノダ+終助詞型」「ノデ+終助詞型」「命題+終助詞型」を「ノダ型」「ノデ型」「命題型」のそれぞれの下位分類として加えることにする。

次の表2と表3は、それぞれJとNJの「理由」の命題に後接する形式<a1>の使用と「相手との関係」を表している。ただし、会話例のなかった組み合わせは表に示さない。「理由」はJ、NJのデータとも23発話あった。

表2 Jの&lt;a1&gt;の使用と「相手との関係」

相手との関係	同等・親しい (12発話)	同等・親しくない (8発話)	相手が目上・親しい(2発話)	相手が目下・親しい(1発話)
形式 (出現率 <sup>9</sup> )	カラ型(41.7%) ノダ+終助詞型(25%) テ形型(16.7%) ノダ型(8.3%) シ型(8.3%)	ノデ型(37.5%) ノダ+終助詞型(25%) ノデ+終助詞型(12.5%) ノダ+ケド型(12.5%) テ形型(12.5%)	ノダ+ケド型(50%) シ型(50%)	シ型(100%)

表3 NJの&lt;a1&gt;の使用と「相手との関係」

相手との関係	同等・親しい(15発話)		同等・親しくない 上級(1発話)	相手が目上・親しい(7発話)	
	中級(6発話)	上級(9発話)		中級(4発話)	上級(3発話)
形式 (出現率)	カラ型(50%) 命題型(33.3%) 命題+終助詞型(16.7%)	ノダ+ケド型(33.3%) テ型(33.3%) カラ型(22.3%) 命題型(11.1%)	ノデ型(100%)	命題型(75%) 命題+ケド型(25%)	ノデ型(33.3%) 命題型(33.3%) 命題+ケド型(33.3%)

表2,3から、NJの「理由」の命題に後接する形式<a1>の特徴について以下のことが分かる。

- (1) 上級のNJは、「同等・親しい」相手に対して、「ノダ型」「テ型」「カラ型」の使用が多く、これはJの「同等・親しい」と同じような使用パターンとなっている。しかし、NJとJで同じ「ノダ型」でもNJの方は「ノダ+ケド型」であるのに対して、Jの方は「ノダ+終助詞型」の使用が多い。また、上級のNJには命題型もみられる。
- (2) 中級のNJは、「同等・親しい」相手に対して「カラ型」「命題型」が多くみられ、上級の

<sup>8</sup> 本論では、文末類型を付加成分ととらえているので、この「命題直接提示型」というのは「付加成分ゼロ型」とでもすべきところかもしれない。

<sup>9</sup> ここでの出現率は、相手との関係(表3ではさらに日本語学習レベル)によって分けられた各グループの発話例数の分母としている。例えば表2の「同等・親しい」では12を分母としている。以下表3,4,5も同じ。

NJ が用いている「ノダ型」「テ型」はみられない。また、中級の NJ は、全体的に「命題型」の使用が多く、使用形式の種類も上級に比べて少ない。

(3) J には「命題型」の使用は全くみられず、全体で使用された種類も多い。

(4) NJ 全体では「理由」を表す 23 発話のうち 5 発話が「ケド型」であり、これによって NJ の〈a1〉形式の種類が増えている。しかし、これには後述するような問題がある。

(5) J が用いる「終助詞型」は、NJ にはほとんどみられず、このあたりに学習困難点があるように思われる。この点については 4-2. で再度考察する。

以下では中級の NJ の会話例をみながら、問題点を考察する。1), 2) は、中級の NJ が使用している「命題型」の例である。

1) (NJ のデータ) A=断る者(男: 24 歳: タイ人: 中級) B=依頼者(男: 31 歳: 日本人), 相手が目上: 親しい【2. 30 分】<sup>10</sup>

(略) 14B 自転車を、お借りしたいんですけど。

(略) 19A (0.1) 私の自転車ですか。

20B はい、そうです。

21A ええと、おー(0.1) // なんか、

22B にじゅう一、え?

22A 今は一

23B うん。

24A 私の一自転車は一

25B はい。

26A こ、こわれちゃった。→「命題型」

27B こわれちゃったの? {笑い}

(略) 32A 車輪の一

33B うん、車輪の?

34A の、空気圧が一、(0.2) ええ悪い // けど。→  
「命題+ケド型」

35B 車輪の空気  
圧が悪い。

36A はい。

37B パンクしちゃったんですか。

(略) 40A はい、そうです。

2) (NJ のデータ) A=断る者(女: 27 歳: タイ人: 中級) B=誘う者(女: 20 代後半: 日本人), 同等: 親しい【2. 37 分】

(コンサートに行かないかという誘いに対する断り)

(略) 48B だから(0.5) 女の人、A さん行かない  
かって。

49A うん、コンサートね。

(略) 54A いつお知らせしますか?

55B 今日、今から、もうすぐ電話くれるの。

56A あ、もう(1.0) あ、やー、だめだめ、東  
海村に行く。→「命題型」

57B {笑い} 分かった。

いずれの「命題型」も、「理由」に後接する形式が欠けているため「断定的に自分の都合を述べる」という感じを受ける。また、1) の 34A の「命題+ケド型」は、この NJ が「ケド」に和らげの効果があることを知っていて用いたものと思われるが、ここでは不適切である。「ケド」は前置きについて和らげの効果を出す、「理由」を挙げる時の形式としては不自然なのである(藤森 1995: 87)。ここは「空気圧が悪いんですけど」のように「ノダ+ケド型」にすればよいところである。しかし、「ノダ」は次の例にみるような誤りを招くため、学習者には取り扱いに

<sup>10</sup> データの記述形式は、ほぼザトラウスキー(1993)に従う。

くいものと思われる。

- 3) (NJ のデータ) A=断る者(女: 20 代前半: フィリピン人: 中級) B=依頼者(男: 24 歳: タイ人), 同等: 親しい【3.55 分】

(面接対象者になってもらうという依頼に対する断り)	51A	<u>日曜日は、暇じゃないんだから。</u>	
(略) 49A ええ? 日曜日なら、ちょっとー	52B		ああ、そうですか。
50B (0.1) え? どうで、ど、どう			

3) では、A は「～んだから」の「カラ型」で理由を挙げているが、「カラ」と一緒に「ノダ」を使用しているため、「私が暇でないということを知っているのに頼むのか」という意味合いとなってしまう。「断り」の「理由」の形式として「ノダ+カラ」は適切ではない。3) の NJ は「カラ」と「ケド」を混同しているように思われる。ここは「暇じゃないんだけど」とすればよいところである。

このように、「断り」の「理由」の命題に後接する形式としての中級の NJ が用いる「命題型」や「ノダ」「カラ」「ケド」は今後の教育課題を示している。

#### 4-1-2. 「理由」の命題に前接する形式 <a2>

「理由」の命題に前接する形式 <a2> として認められたのは、「ちょっと」だけである。J のデータにはこの「ちょっと」が多くみられ、「理由」を表す 23 発話のうち、10 発話(43.5%)が「ちょっと+理由」である。例えば、次のような使い方である。

- 4) ちょっともう予定が入っちゃってるんですけどー。(J のデータ)

これと比べて、NJ の方は、「理由」を表す 23 発話のうち、「ちょっと+理由」は 1 発話(4.3%) (上級者)しかみられなかった。その代わりに、「なんか+理由」と「まあ+理由」がかなりみられた。例 1) の (22A~)「ええと、おー (0.1) なんか、今はー、私の自転車は、こわれちゃった」はその例であり、また以下の 5) にも同じような例がみられる。

- 5) (NJ のデータ) A=断る者(女: 24 歳: インドネシア人: 上級) B=誘う者(男: 23 歳: ブラジル人), 同等: 親しい【2.20 分】

(略) 28B まあ、A ちゃんも、まあ欲しければ、一緒に行こうか?	33A	へえ、でも (0.2) まあ、は、じゃ、大丈夫です。
29A あああ、あ他の人は誰?	34A	私も <u>なんか</u> 、 <u>まあ私</u> (0.2) 自分部屋で (0.2) 作ろうと思って、なんかね、いや、大丈夫です。
30B まあ、他のは、ブラジル人だけど		
31A あ、そう? {ちょっと笑う}		
32B そう。		

このように上級学習者でも「なんか」「まあ」を頻繁に使っているが、これらには、「ちょっと」のように相手に配慮し「理由」の内容を和らげる効果がないので、単に間を繋いでいるだけと理解される。上級学習者がこのような状況で「なんか」「まあ」を使うことには次のような理由が考えられる。すなわち、学習者は「なんか」の一つの意味である「それが何であるか特定できないが」(川上 1991)と「まあ」の一つの意味である「軽く押さえた判断の意味」(森田 1989)を過剰的に捉え、「ちょっと」と同じように「理由」の内容を和らげる効果があると解釈して用いている可能性があるのである。

#### 4-2. 「不可」の付加成分

##### 4-2-1. 「不可」の命題に後接する形式 <b1>

まず、JとNJの「付加」の命題に後接する形式<b1>の使用と「相手との関係」を表4,5にまとめる。「不可」はJのデータでは15発話、NJでは9発話あった。

表4と表5から、JとNJの「不可」の命題に後接する形式の使用に違いがみられる。Jのデータでは、「相手が目下」の場合に使われる「不可」(いやだ, そんなの)以外の全ての「不可」の命題に後接する形式(「~かな(46.7%)」「~な(あ)(26.7%)」「~わ(13.3%)」「~んですが(6.7%)」)がみられる。自問的・独話的な働きを持つ「~かな」「~な(あ)」は、断る者が相手に対して直接的に「不可」の内容を表すのではなく自分に対して問いかけるような意味を示すことによって和らげの効果を持つ。中途終了文の「~んですが」や、鈴木(1968)が「軽い詠嘆, 感動や決定, 主張の気持ちをこめて, 話しの内容をやわらげたりまた刺激のない, やわらかな感じを表す」と説明している「~わ」の場合も、和らげ効果を持ち「不可」形式として適切である。

表4 Jの<b1>の使用と「相手との関係」

相手との関係	同等・親しい (12発話)	同等・親しくない (1発話)	相手が目上・親しい (1発話)	相手が目下・親しい (1発話)
形式	無理かなー(3発話) だめだな(2発話) 難しいかな きついかな やめとこうかな 行けないな 時間取れないなあ 無理だわ パスにしますわ	行けないんですが	だめかな	いやだ, そんなの
各形式の出現率	かな(50.0%) な(あ)(33.3%) わ(16.7%)	のだ+が(100%)	かな(100%)	命題のみ(100%)



表 5 NJ の〈b1〉の使用と「相手との関係」

相手との関係		同等・親しい(7 発話)	同等・親しくない(1 発話)	相手が目上・親しい(1 発話)
日本語 の学習 レベル	中級	だめだめ できない <u>よ</u> できない		できません
	上級	できない(2 発話) 断らなければならない 行けない <u>んですよ</u> ね	お断りしたいと思います	
各形式の出現率 (%)		命題のみ(71.4%) よ(14.3%) のだ+よね(14.3%)	命題のみ(100%)	命題のみ(100%)

これに対して、NJ のデータでは、「相手との関係」と関係なくほとんどの「不可」の内容が「断定形」で終り、ストレートに「不可」を表している。その他、「できないよ」、「行けないんですよね」がみられるが、「できないよ」の方は、相手がまだ認識していない「不可」(できない)の内容を強く伝えることになり、和らげ効果はない。

このように、NJ では「不可」の命題に後接する〈b1〉の不使用が目立つが、これで 4-1-1. でみたように NJ の「理由」の命題に後接する形式に「終助詞型」がみられなかったことと同じような結果が得られたことになる。すなわち、学習者にとって終助詞が一つの学習困難点となっているのである。

#### 4-2-2. 「不可」の命題に前接する形式〈b2〉

「不可」の内容を修飾し和らげの効果を持つ、「不可」の命題に前接する形式〈b2〉をみると、J のデータから、「不可」の 15 発話のうち、「ちょっと+不可」が 8 発話(53.3%)、「やっぱり+不可」が 1 発話(6.7%)、「やっぱり+ちょっと+不可」が 1 発話(6.7%)みられる。これに比べて、NJ のデータでは「不可」の内容がそのまま述べられ、「ちょっと」や「やっぱり」のような形式は一つもみられなかった。J と NJ の違いを以下の例で示す。

6) (J のデータ) A=依頼者(20 代後半・男性) B=断る者(20 代後半・男性), 同等: 親しい

【4.17 分】

(友人を成田まで迎えに行ってもらおうという依頼に対する断り)	42A そうだな.
(略) 31A で、俺、今日仕事だから、	43A 0 はだめだし、
32A えーと、誰かいないと思って、	44B そうか.
33A 今、電話したんだけど、	45B (0.2) いないね.
34B ほんとう.	46B かわいそうだね.
(略) 41B 他に行く人いないの?	47A {笑い}
	(略) 66B えー、ほんとまいったなー.

67A	{笑い}	(略) 95A	うん、それは黙っててあげるよ。
(略) 86B	(0.5) こっちも忙しいからなー。	(略) 99A	(0.5) うーん、じゃどうしようかな。
87A	後、誰かいないかなー。	100B	(0.5) うん、悪いけど、
88B	うん。	101B	<u>やっぱー</u> 、 <u>無理</u> かなー。→「やっぱり+不可」
(略) 91B	(1.0) きっと、もし断ったとかいうのば れたらさー、	102A	あー。
92B	殺されるかもしれないねー。		

7) (NJ のデータ) A=断る者(女: 25 歳: インドネシア人: 上級) B=誘う者(女: 24 歳: インドネシア人), 同等: 親しい【4.15 分】

(略) 24B	ええ、A、なんかねえ、まあ今晚、なん か、一緒に晩御飯、食べましょうか。	うしよう。
(略) 31A	あのね、明日東京行くから、	34A (0.2) ごめん、 <u>できない</u> 。→「不可」
32B	うんうん//うん。	35B あ、できないの?
33A	から、ど	36A ううん。

ところで、NJ の「不可」のもう一つの特徴は、「できない」の多用である。NJ はよく「できない」を「不可」として使っているが、「できない」で断る例のほとんどは「行かないか」「来ないか」「食べないか」というような誘いに対するものであり(例えば、例 7)、これらに対する答えは「行けない」や「だめ」などとなるはずである。また、J の「不可」の形式は「無理、だめ、難しい、きつい、やめとく、パスにする、行けない、時間が取れない」のように、さまざまな表現がみられたのに対し、NJ では「できない、断る、だめ、行けない」しかみられず、使う表現のバリエーションが少ない。

日本語では、「不可」を省略し「理由」だけ述べて断る場合が多いが、断る者が明確な「理由」を持っていない(例えば、例 6)のような場合などには、少しずつ否定的な態度を表し、最後に「不可」を述べなければならないこともある(カノックワン 1995)。このような状況では、和らげの効果を持つ修飾表現や文末形式や終助詞の役割が大切になると思われる。NJ のデータから、NJ の「不可」の形式や修飾表現、文末形式、終助詞の使い方にはまだ問題が多いことが分かる。

#### 4-3. 否定的マーカー

「依頼」や「誘い」を受け、それを断りたい時に、断る者が断りの中心の「理由」「不可」の前に、否定的マーカー(eg. うーん、あはー、あー)を入れることがある。このようなマーカーは「断り」へ入る前のワンクッションとなり、相手に対する心配りを示すものとなる。相手の側から、否定的マーカーがあると「断られる」ことを予測でき、心の準備ができることになる。否定的マーカーは時間的にはわずかなものだが、会話において、とりわけ「断り」のような言語

行動においては、そのわずかな時間と意味のない言葉が人間関係を良好に保つための重要な役割を担っている。否定的マーカーは「理由」と「不可」の前だけに現われるものではないが、ここでは「理由」「不可」の前の否定的マーカーのみを取り上げる。

#### 4-3-1. 「理由」に先行する否定的な態度を表す形式(否定的マーカー)〈c1〉

J と NJ のデータでは、どのような否定的マーカーがみられるだろうか。

J のデータでは、23 発話の中「理由」の前に現れる否定的マーカーは「うー(ん)」3 例(13.0%)、「いやー」「あの一」「ええと」それぞれ2 例(各 8.7%)、「あ」「あはー」「なんか」それぞれ1 例(各 4.3%)であった。以下に例を示す。

8) (J のデータ) A=誘う者(20 代前半・女性) B=断る者(20 代前半・女性), 同等: 親しくない【1.10 分】(否定的マーカーを二重下線で示す。以下, 9), 10) の例も同じ)

(今度の日曜日にソフトボールの試合があるので参加してくれないかという誘い)

(略) 16A 暇一, ありませんか?

(略) 19B あ, ちょっともう予定が入っちゃってるんですけど一。

(略) 22A 1,2 時間でいいんですけど。

23B うーん, ちょっと今すごく忙しい時期なんです,

24B 日曜日でも研究室とか行かなくちゃいけないんですよ一。

25A ちょっとだけ一, あの一, 汗を流すってのは, どうですか?

26B いや一, ほんとに何か, 10 日ぐらいあとに二,

27A うん。

28B 研究会で発表しなくちゃいけないでね,

29A うん。

30B その準備が今大変なんですよ。

(略) 134B すいませんけど一。

9) (J のデータ) A=断る者(27 歳・女性) B=依頼者(?・男性), 同等: 親しくない【1.03 分】

(略) 9B 法廷立ち合いの // タガログの通訳の関係ですね,

10A はい。

11B あのう, 電話を差し上げているん // ですが。

12A はい。

13A え一, いつでしょうか。

14B 8 月なんですけど,

15A あは一, ちょっと 8 月は一,

16A あの一, いませんので一,

17B あ, 一ヶ月いらっしゃ // らないですか。

18A はい。

(略) 38A はい, 分かりました。

8) での否定的マーカーは「あ」「うーん」「いやー」である。「あ」というのは「理由」を思い出す瞬間に使うマーカーで、否定的な意味としては「うーん」や「いやー」ほど強くないと思われる。また、9) の「あはー」は否定的な態度も表すと同時に、断る者が「残念な気持ちを持つ」ことも示している。

では、NJ の「理由」の前に現れる否定的マーカーはどうだろうか。NJ のデータ 23 発話の中では「理由」の前でみられるマーカーは、えーと(ね, まあ)「あの一(まあ)」「なんか(ええ,

まあ)それぞれ3例(各13.0%),音を伸ばさない「うん」,「あー」それぞれ2例(各8.7%),「あ」「いや」「えー」それぞれ1例(各4.3%)であって、Jが使用したマーカーと同じものもみられる。しかし、これは必ずしもJでみられるような否定的な意味をもつマーカーとはなっていない。例えば、

- 1) (NJのデータ) A=断る者(男:24歳:タイ人:中級) B=依頼者(男:31歳:日本人),  
相手が目上:親しい【2.30分】

(略)14B 自転車を,お借りしたいんですけど。	23B うん。
(略)19A (0.1)私の自転車ですか。	24A 私のー自転車はー
20B はい,そうです。	25B はい。
21A ええと,おー <sup>11</sup> (0.1) // <u>なんか</u> ,	26A <u>こ</u> , <u>こ</u> われちゃった。→「理由」
22B にじゅうー, え?	27B <u>こ</u> われちゃったの? {笑い}
22A <u>今はー</u>	

この例1)の21Aの「ええと」「なんか」のようにNJでみられた「理由」に先行するマーカーは、Jが使用した否定的マーカー「うーん」と違って、間繋ぎの意味が強く、否定的な意味を示しているといえるのである。

#### 4-3-2. 「不可」に先行する否定的な態度を表す形式(否定的マーカー)〈c2〉

次は「不可」の前の否定的マーカーをみる。

- 10) (Jのデータ) A=断る者(20代前半・女性) B=誘う者(20代前半・女性), 同等:親しい  
【5.43分】

(略)35B 来週ぐらいに映画でも見に行こ,行かないかなと思って。	出さなきゃいけないから。
36A あー,映画かー。	92B おー。
(略)83A うーん(0.5)	(略)136A レポートに取りかかれなくて。
84B どうか?	137B あー,なるほどねー。
85A (0.5)うーん,ちょっと実はレポートとかも	138A <u>うーん</u> , <u>だからね</u> ,
まだできてなくて {笑い}	139A <u>ちょっと来週だどー</u>
86B あー,レ,あー。	140B きついんだ。
(略)91A あー,夏休みの,1学期のレポートを	141A <u>きついかなー</u> 。→「不可」

10)では「うーん」のような形式が「不可」の前の否定的マーカーとしてみられる(138A)。Jのデータ15発話の中でよくみられた「不可」の前の否定的マーカーは「理由」ののところと同じように、「うー(ん)」3例(20.0%)である。その他は「えー」2例(13.3%),「あ」「あー」「まー」

<sup>11</sup> ここで学習者が使っている「おー」は、日本語ではなく、学習者の母語であるタイ語の[vv]という発音であった。[vv]は間繋ぎの機能を持って、日本語の「ええと」に相当するものである。

それぞれ1例(各6.7%)であった。全体として「不可」の前の否定的マーカー出現率は53.3%ということになる。

NJのデータはどうだろうか。NJのデータ9発話の中、「不可」の前に現れる否定的マーカーは、「まー」が2例みられ(22.2%)、あとは「ええと、なんかうん」と音を伸ばさない「うん」が1例ずつ(各11.1%)みられた。全体として「不可」の前に現れる否定的マーカー出現率は44.4%ということになる。Jの場合と比べ出現率に大きな違いがないが、これは、次の例(11)、(12)にみられるように他の付加成分とともに考察されなければならない。

11) (Jのデータ) A=依頼者(29歳・男性) B=断る者(29歳・男性), 同等: 親しい【1.13分】

(車を貸してほしいという依頼に対して)

(略) 25B 使いたい?

26A うん.

(略) 31B (1.5) 貸してあげてもいいけど,

32B 何時返してくれるか分かる?

33A あー {笑い} あのメンツだと,

34A ちょっとな.

(略) 40B あ, ほんと.

41B うーん.

42B (1.0) やっぱり, ちょっと, 無理かな.

43A あ, そうか.

12) (NJのデータ) A=誘う者(男: 20代: 日本人) B=断る者(男: 20代: バーレーン人: 中級), 同等: 親しい【1.12分】

(食事しないかという誘いに対して)

(略) 28B ええと, 私, 食べたいよ.

29A {笑い}

30B うん, Sさんもそろ, そろそろ帰るだから,

私全然, あのう, Sさんの料理食べないよ.

31A ああ, //S

32B だから, 今日私食べたいよ.

33A あ//あ.

34B でもできないよ.

35A ええ.

36B そうね, うん, じゃあ.

37A はい, じゃあ.

38B ありがとうね.

例11)のように、Jのデータにも「不可」の前に否定的マーカーがないものがあるが、その場合には必ず「ちょっと」のような和らげ効果を持つ修飾表現がつくのである。これに対し、例12)のNJの場合は、否定的マーカーがないうえに、修飾表現も付かず唐突で断定的に聞こえる。これがJとNJとの違いなのである。

## 5. まとめと今後の課題

本研究では、「断り」の発話行為について、電話での実際の会話を資料として用い、書き込み式やロールプレイでは観察のしにくい表現形式である「断り」の「理由」「不可」の文末及びこれらを修飾する形式と、これらの前にある否定的マーカーを観察し、その使用の特徴を日本語母

語話者と比較しながら日本語学習者の問題点を考察した。その結果をまとめると次のようになる。

(1) 「理由」の命題に後接する形式〈a1〉については、上級の学習者は「同等・親しい」相手に対して日本語母語話者とほぼ同じような使用パターンがみられた。中級レベルの学習者は後接する形式を使わないで、命題内容をそのまま述べる例が多くみられた。これは「自分の都合を断定的に述べる」ように感じられ、相手に誤解される可能性がある。また、「理由」の内容を修飾する形式〈a2〉の使用の特徴として、学習者は日本語母語話者にみられる「ちょっと+理由」の使用が少なく、代わりに「なんか+理由」「まあ+理由」が多くみられた。しかし、「なんか」「まあ」には「ちょっと」のように相手に配慮し「理由」の内容を和らげる効果がないので、単なる間繋ぎのように感じられる。

(2) 「不可」の命題に後接する形式〈b1〉と「不可」の命題に前接する形式〈b2〉は、日本語母語話者では出現頻度が高いが、学習者ではあまりみられず、「だめ」「できない」のように「不可」の命題のまま断る場合が多かった。また、「不可」の命題形式として、日本語母語話者ではさまざまな表現が観察できるが、学習者では、限られた表現しか観察できず、バリエーションが少ないことが分かった。さらに「できない」という表現での「不可」の表明は誤用であるが、この「できない」の誤用が目立ち、日本語が流暢である上級レベルの学習者にもみられた。

(3) 「不可」の命題に後接する形式〈b1〉と「理由」の命題に後接する形式〈a1〉のJとNJの比較から、学習者にとって終助詞が一つの学習困難点となっていることが分かった。

(4) 「理由」「不可」の前に現れる否定的マーカー〈c1〉〈c2〉の使用に関しては、日本語母語話者がよく使用する「うーん」は学習者にはみられず、「えーと」「あの一」などがみられた。しかし、学習者の「えーと」「あの一」は間繋ぎという感じにしか聞こえず、「うーん」のような否定的な感じを前もって示す役割をあまり果たしていないように思われる。否定的マーカーは、「断り」の中心の「理由」「不可」の前触れとなり、断る者の心配りをみせると同時に、相手の心の準備を促し、「断り」という状況の中で人間関係を良好に保つ重要な役割を担っている。しかし、学習者には有効なマーカーの使用があまりみられなかった。

(5) 日本語母語話者と学習者の各表現形式使用率をまとめると次の表6になる。

〈c1〉〈c2〉には有効であるか否かに関わらずマーカーとなるものを数えて入れたために数値の

表6 JとNJの「断り」の表現形式の使用率(%)

	〈c1〉	〈a2〉	理 由	〈a1〉	〈c2〉	〈b2〉	不 可	〈b1〉
J	52.0	43.5		100.0	53.3	66.7		93.3
NJ	69.5	4.3	69.5	44.4	0	11.1		

(各数値はJの理由23発話、Jの不可15発話、NJの理由23発話、NJの不可9発話をそれぞれ100とした%を示す)。

上ではJとNJの違いがはっきりしないが、マーカーの内容については上述の通りである。その他の表現形式に関しては、日本語母語話者に比べ、学習者の使用率がかなり低いことが表6から明らかである。特に「理由」の命題に前接する形式〈a2〉、「不可」の命題に後接する形式〈b1〉、「不可」の命題に前接する形式〈b2〉の差は大きい。

現在の日本語教科書では、「断り」の形式として取り上げられているのは、主に「理由」の内容を表す節末及び文末形式の「～から」「～ので」か、「ちょっと…」のような言いよどみの形式である。表6が示す通り、実際の会話においても、日本語学習者(上級者だけであるが)は「理由」の内容に付加される節末及び文末形式(「～ので」など)については比較的上手に使用している。また、「ちょっと…」のような言いよどみも日本語学習者のデータからみられた(例3の49A:「日曜日なら、ちょっとー」)。しかし、「不可」の命題に後接する形式や前接する形式及び否定的マーカーについては、現在の日本語教科書ではほとんど触れられていない。これと比例して、今回の実際の会話データでも学習者の使用がほとんどみられなかった。上述のように「不可」「否定的マーカー」は「断り」の表現として重要である。教科書においてもこれら「断り」の表現の問題を今後考慮すべきであろう。

本稿では自然会話のみをデータとしたため、学習者の言語バックグラウンドのバリエーションやデータの数が従来のデータの収集方法と比べて少なく、一般化するにはやや説得力を欠くところがあったかもしれない。しかし、この方法を採用することで、従来行われたデータの収集方法では観察できなかった種々の問題を明確にし、傾向を示すことができたと思う。この方法では、プライバシーの問題や、「断り」という特定の状況を収集しなければならないということで、協力者の数やデータの数を多く集めることは難しいが、今後、より多くのデータを収集して今回の結果を再確認しなければならないであろう。また、教育の場に役立てるには、学習者の「断り」に対する日本人の印象や、「謝罪」「代案」など中心構造以外についても研究を行い、談話レベルにおける学習者の「断り」のストラテジーを考察していく必要がある。

## 参 考 文 献

- 生駒知子・志村明彦(1993)「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー;「断り」という発話行為について」、『日本語教育』第79号, 日本語教育学会。
- カノックワン・ラオハブナキット(1995)「日本語における「断り」——日本語教科書と実際の会話との比較」、『日本語教育』第87号, 日本語教育学会。
- 川上恭子(1991)「「何か」の不定対象と文型式」、『園田語文』第6号, 園田学園。
- 熊井浩子(1993)「外国人の待遇行動の分析(2)——断り表現を中心にして」, 静岡大学教養学部研究報告人文社会科学篇 第28巻第2号。
- 鈴木舟士郎(1968)「「ぜ」、「さ」、「わ」」, 松村明編『古典語・現代語 助詞助動詞詳説』, 学燈社。
- 藤森弘子(1995)「日本語学習者にみられる「弁解」意味公式の形式と使用——中国人・韓国人学習者の場

- 合』、『日本語教育』第 87 号, 日本語教育学会.
- ポリ・ザトラウスキー (1993) 『日本語の談話の構造分析——勧誘ストラテジーの考察』, くろしお出版.
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』, 三省堂.
- 横山杉子 (1993) 「日本語における『日本人に対する断り』と『日本人のアメリカ人に対する断り』の比較——社会言語学レベルのフォリナートーク」, 『日本語教育』第 81 号, 日本語教育学会.